

資本主義の「次の資本主義」 新たな社会システムの創造を経済人の手で

副代表幹事
企業経営委員会 委員長
富山 和彦
経営共創基盤
代表取締役CEO



今年に入ってから、経済的には堅調な米中の経済の一方で、世界的に株価が乱高下し複雑怪奇な雰囲気である。他方、政治的には、欧米における自国第一主義勢力の拡大、北朝鮮情勢、中東情勢など、大きなリスク要因を孕んでいる。こうした状況に人工知能やロボティクスによる第4次産業革命の大波はどんな影響を与えるのか。

産業革命と言われる破壊的イノベーションは、画期的な技術革新に先導される。蒸気機関(18世紀)や自動車(19世紀末)の発明など、大きな技術革新は生産性を飛躍的に高め、新たなビジネスモデルを生み出して産業構造を一変させてきた。問題はここ先である。産業構造の大転換は、人々の働き方、生活のあり方を大きく変える。社会全体が豊かになる一方で、こうした変化についていけない人々が増えるために社会的、政治的には不安定さが増す。生活者としての生身の人間は不器用で情緒的、習慣的な生き物である以上、簡単には変わらないのだ。

20世紀中頃までの大きな戦争と大量虐殺の時代も、科学技術・産業イノベーションと社会・政治

システムがバランスを失った時代であり、一時期、その解決仮説として、マルクス・レーニン主義や全体主義が勃興したが、むしろ悲劇は増幅した。社会主義思想は経済的欲望を強く制限する国家モデルに解決策を見いだすが、「所有」や「稼ぐ」自由は、思想や言論以上に生物たる人間の根源的な生存欲求と深くかかわる。それを強く制限するには、極めて強権的な国家システムを取らざるを得ない。加えて、動機付けと創意工夫の自由を奪われた社会の生産性は停滞し「食べる」のも難しくなる。

さて、そんな歴史を知っている私たちは、新たな破壊的イノベーションの時代をどう生きるべきか。

歴史の教訓は、インテリが頭で考えた「特効薬」的な解には懐疑的であれということだろう。知恵の源泉は、やはり現場にある。実際に起きている社会的な課題に^{たいじ}対峙し、問題解決に忍耐強く取り組む中から、人間性の現実を踏まえた実効性のある解決策を見いだすしかない。そう、経済社会の現場最前線にいる私たち経済人こそが、新たな社会・政治システム、「次の資本主義」を創造する気概を持たなくてはならないのだ。

